

「新学期を迎えて思うこと」

園長 高杉美稚子

オリンピックの報道に始まり熱狂したアツイアツイ夏でした。努力、頑張り続けること、協力すること、信念を持つこと、人を信頼すること、自分を信じる力、あらゆる大切さを選手の姿を通して学ばせていただきました。そして、負けても本当に一生懸命やった人の笑顔は素晴らしいものがありました。これ以上できないという限界まで、頑張った人にはすがすがしい潔さがあるのでしょうか。アノ姿をモデリングとして私達も生活して行きたいものです。さて秋がやって来るとはいえ、まだまだ、暑い日が続きます。以前からの吉塚幼稚園の教育方針のひとつである「手洗いの徹底指導が子ども達の健康を守る」事を今後も家庭教育との連携を図りながら実施していきたいと思います。

さて、長い夏休みも、終りを迎え、新学期が始まります。

これまでの経験を土台として、子ども達は心身共に、グーンと伸びる時期です。夏休み中の生活のムードから気持の転換が出来ない子ども達も段々と活発に活動する姿が見られるようになってきます。心の安定が図られると、友達との積極的なかわりあう姿へと発展し、運動会等の集団行動がスムーズにとれるようになってきます。友達とかわって遊ぶ中で、自分の気持や考えを言葉で表したり、お互いの思いを伝えあったりする事が多くなり、友達の会話に関心をしめす事も多くなりますが、半面、自己主張もふえ衝突もおきてくる時期といえるでしょう。家庭での言葉かけを多くして戴いて、子ども達がおおらかに活動出来るように、温かな励ましをお願いします。

又、知的好奇心や探索心も益々旺盛になります。この時期子ども達の行動範囲は広くなり、動線が拡大されます。特に、秋は、一年中で最も運動しやすく、子どものエネルギーも内や外に向かって、思い切り発散され、かつ、友達関係も深まる月です。

この時期の子どもの成長ぶりは目を見張るものがあります。子ども達の動線は、どんどん、拡大化され、活発さを増しています。特に、年中児の子ども達にとっては入園後、半年をすぎ、親をはなれて、友達の家にいきいきして、遊ぶ事ができるようになり、動線も予想以上に拡大しています。そこで、この時期に2つ思う事があります。

その1つは、体重の増加にともなって、体がしっかりしてくるこの時期に適度な休憩、睡眠、栄養を考えながら、積極的な体づくりに取り組む必要があるという事です。

1つの「運動会」という体験保育をとおして、子ども達に能力一杯体力を出しきる事、休憩をとれる事のタイミンクを体で学んでほしいものです。体力を出しきる前に適当に休む事を覚えてしまつては、本当の体力は身につかないのです。そういった子どもにとっては、大変そうにみえる運動会の練習もたいへん良い体力作りのきっかけとなります。そして、又、なにより集団で行うことにより、友達同志の「心の育ちあい」が最も多くみられる場面です。

2つ目は、交通安全の事です。動線が拡大すればする程、動線に活発さが出ればする程、危険な場面への直面が考えられます。登園、降園時、の歩行や降園後の子どもの動線の理解と注意はいうまでもありませんが、具体的な、場所での個別指導が必要でしょう。子どもの交通事故を運動機能のせいにする動きがでていますが、子どもの運動機能を満足に発達させえない物理的、精神的環境を放置してきた大人に責任はあるはずです。この事も合わせて考えてみたいものです。

昨年度より、保育の中に取り入れております「元気もりもりタイム」は昨年の運動会からその成果を発揮していますが、今後の子ども達の活動の中にもその成果が表われてくる事と思います。どうぞ、新しい保育の試みにもご期待下さい。子ども達が健やかなそして、感動ある毎日を過ごせるように、今学期も、職員一同頑張りたいと思います。

さて、前学期に保護者の方の悩みを聞きました。子ども会や、学校での活動での保護者の方の話し合いと協力の難しさについてでした。そのことについて今年の「教師研修大会、沖縄大会」で助言を致しましたので、共に考えてみたいと思います。

1、場を見抜く力

人は、場を見抜く力を持っています。個人はそれぞれ独自の雰囲気を持っています。その雰囲気はそこにいる人たちが持っている無意識の価値観から生まれるものです。人はこの雰囲気に対して責任があります。人はその事を敏感に感じ取り、影響を受けるからです。大人同士の関係のよしあしも雰囲気のなかに現れるでしょう。ですから、無意識にその人の事を嫌っていると言う中ではなかなか、協力することが出来ません。だから出来ないと決め付けるのではなく、それが人を生きやすくしたり生きにくくさせたりするということを知っておく必要があります。そのためには、**感覚の鋭敏性を持つことです。**

人の動きは多種多様であり、一瞬一瞬の観察と判断が大切ということです。神経を365度持った変化を外面だけでなく内面も含めて見ていくことが大切です。感覚がするどい、感覚の鋭敏性を持つことは、人との付き合いにおいて、非常に重要です。感覚が鈍い事は、人の心に気付けない、即ち、人の気持ちがわからない、だから、人付き合いが下手である、とこうなるわけです。

人の気持ちだけではありません。自分の感覚にも鈍感な人は、自分が今、なんで腹がたっているのかわからない、時には傷ついている事にさえ、気付かなくて腹がたっているそんな状態になるのです。自分の心の傷に気付かなくて、人の心の傷をわかって上げる事出来るはずがありません。感覚の鋭敏性が身につけば場を見抜く力も出てきます。

2、最大の課題は自分

人はいつも正しくて、完璧でなければならぬのでしょうか。人の気づきに気づくことが出来る人は自分の今のありように気づくことが出来ます。

大切なのは、今、自分がどの状態にいるのか、どのような感情に動かされているのか、今自分が立っている位置に気づくことです。

安定しているのか、どのような状態にいるのか知っていれば落ち着くことが出来ます。落ち着くと、自分の状態も又見えてきます。これからの時代はだからこそ、カウンセリングマインドが必要になってくるのですが、今、自分がどのような感情に支配されているのか、その感情はどこから来ているのか、その感情が自分の幼い時の経験からくることなどに気づくことが出来れば、もっと、共感しやすくなります。

自分の一番深いところにある気持ちに触れながら本当の自分の気持ちを開いていく時こそ、人と深く触れ合うことが出来ると、心理学者の先駆者達は教えてくれています。いつも自分自身の本当の気持ちに心を傾けて、自分自身としっかりコミュニケーションをする力を養っていけばいいのです。たとえば人にイライラする、自分にイライラするとき、それはなぜと自分に向き合うと幼かった頃の寂しかった自分が見えてくるかもしれない、そのことに気づくと、そうすると人の気持ちを共感できることがあったりするのです。

そして次に相手の立場になることの練習が必要です。自分の気持ちにしっかり気づけば、相手の立場も見えてきます。

3、目標の明確化をする

方法論をめぐる意見が対立する時は、起こっている意見より、より高いところのからの意味づけることが出来る、目標をかけた明確化することです。そうすることで、手段だけで争っているなど、問題がどこにあるか見えてきます。こうすれば、結論を急がず、議論をつづけていくことができます。感情的な対立になる事も防げます。目標を立てることは答えをすぐ得るためではなく、疑問を持ち続けることであり、互いに育つために必要です。

4、育ちあう共同体をめざす

人間関係の根底にあるものは、相手をそのままでよいと認め、存在を否定せずに、一緒にいる事が出来る、相手が始めようとした事を尊重し、相手とのやり取りを楽しむ力です。

人の中で生きていくことの楽しさをする事です。大人になりこの力が成熟していくにつれ、激論の中でも相手の存在を認め、たとえばテーブルの上では言い合っても、テーブルの下ではしっかり手を握り合っているような人間関係が大人にも必要でしょう。大人の世界でも人とのかかわりが希薄になっている時代です。傷つくことを恐れて、あまり人とかかわらずに済ませてしまおうという傾向すらあります。かかわらなければ当然衝突もありますが生きていく楽しみは取り巻く人々とのさまざまな営みです。

子ども自身が大人から何かできるから認められるのではなく、自分の存在をそのまま喜ばれる体験や自分が始めた事を大事にされる体験、人間関係の中で自分の気持ちを大事にされた体験をいっぱいしなければ人の気持ちを大事にする、大人になっていくことが難しい事を考えれば、私たち自身がそのような体験を人間関係の中ですること大切です。

人は、いずれ自分の課題に直面することは避けられません。自分の問題としてとらえた時、

問題は既に解決に向かっています。誰かのせいにしている間は、問題は閉じ込められてしまいます。人は人間の問題によって、人間によって刺激されます。人はこのときの自分自身や、人との対話で自分の自信を成長させるほかありません。これは子育てでも同じです。だから子育ては自分育てなのです。このことが理解できた時、人から非難される恐れから解放されて安心して自分のことを振り返り、話し合うことが出来るようになるでしょう。

そこでは、自分の気づきに、自分の奥底にある感情に気づいて素直に表現することです。なかなか難しい場所もあるかもしれませんが、同じ事をするものとしての喜び、悲しみ、苦しみなどの奥底にある感情は共通するものがあります。たとえ、行動パターンや、考え、立場は違っていてもその感情は理解しあえます。だから自分の行動にある感情に気づいて表現することが又、必要なのですが……。その事を表現することによって、お互いの悩みや、驚き、疑問、喜び、苦しみ、悲しみを共有することが出来、お互いの理解が増し、最終的に互いに変わっていくことが出来ます。

その違いを認めた上でのお互いの深い理解に繋がります。立場が違えば、行動や、考えが違って当然です。でもその事を越えた向こうで理解できるのです。そうすることで、行動や考えの違いを認めることが出来るようになります。人が皆、全く考えや行動が同じであることのほうが恐ろしいですね。感情の理解が出来れば、行動や考え、方法は違っていいのです。それが個性です。それが人間教育だと私は考えます。

5、より具体的な協力

そして最後に大切なのは、より、具体性のある協力の仕方を模索していくことです、実際の現場で奥底には理論がしっかりしていないと成り立ちませんが、具体的な行動が取れないようでは、机上の空論になってしまいます。

目標を明確化し、感情の理解が出来たなら、後は、具体的な行動に移すのみです。このとき大切なことはより小さな、今日、今からできる小さな行動の積み重ねの計画が大切です、大きなチーズは一人で、一日では食べつくせませんが、365日かければ一人で食べつくせます。今、自分が出来る範囲のできることから、まず始めることが大切です。感情が理解できればコミュニケーションもとりますから、十分なコミュニケーションをとりながら、ひとつずつ積み上げていきましょう。

こうすることにより、人が、共に作り上げていく楽しさにも気づいていくでしょう。この共に気づきあげる喜びを知った人はへこたれることなく、活動を続けていくことが出来ますし、このような親の関係の中で育てられる子ども達は、幸せです。そして本当に自分が大好きな、必要以上に他人の目を気にしない、自立した子どもに育っていくことでしょう。

親である以上、子どもを通した親同士の人間関係が絡んでくる会合には参加せざるを得ませんね。どうかその事を通して親として人間として育ててください。嫌な思いをするだけでは時間が惜しいですね。同じ嫌な思いをしたと自分が感じたのであるならば、そこから何かを学んで、ころんでも起きあがりましょう。せっかくころんだらただでは起きないで、何かをつかんで起き上がりましょう。その姿をモデリングとして、又子ども達が育っていくので

すから。人生に無駄な体験などはないと思います。全ては自分が育つ為に必要な体験だから自分に今、起きているのです。なぜならその事を既に乗り越えているならば自分にとってつらい体験とは感じないはずなのですから。